

障害のある人の世界にふれる

『シティ・ライツ』が耕してきた バリアフリー映画鑑賞という文化① ～音声ガイド制作編～

取材・文 小笠原 綾子

おがさわら・りょうこ 自分事と思える仕事や活動をする“複業”を実践中。ライター・編集者としてインタビュー記事作成や印刷物の制作をするほか、地域コミュニティ活動にかかわる。

目の見えない人にも映画の感動を届けたい、一緒に楽しみたい——。そんな想いから、平塚千穂子（ひらつか・ちほこ）さんが立ち上げた、バリアフリー映画¹鑑賞推進団体 シティ・ライツ（City Lights）。運営者も含めてボランティアメンバーのみで構成され、会員費や寄付金によって運営されるこの団体は、今年20周年を迎えます。

シティ・ライツでは、映像の視覚的情報を補う「音声ガイド」というツールによって、視覚障害者も映画を楽しめる環境づくりに尽力してきました。運営者とサポートメンバーという、立場の異なる関係者に話を聞いてみたところ、単に視覚障害者をサポートしている団体ではなく、サポートメンバーたちの“学びの場”にもなっていることがわかりました。

顔を“もらう”のではなく 一緒につくって味わう

「シティ・ライツって、ボランティア団体という側面もありますが、根幹は“映画鑑賞サークル”なんです。みんなで映画を観て、好きな映画について語り合いながら楽しさを共有する、サークル活動

みたいなもの」

そう話すのは、シティ・ライツの副代表を務める、美月めぐみ（みつき・めぐみ）さん。全盲の舞台女優です。

「『見えない人はかわいそうだから、映画を観させてあげよう』ではなくて、視覚障害者、晴眼者²問わず、映画好きの仲間が増えたらいいよねって

う、平塚リーダー（平塚さん）のスタンスに共感して、設立時からかかわっています。

視覚障害者は、点訳、朗読、音声ガイドなどをしてくれる人から恩恵を受けています。でも、受け取るだけだと、『やる側』『やってもら側』という関係になり、極端なたとえで言うと、動物園で“柵から餌を放り込んでもらう”みたいな感覚になってしまうんです。

そうではなくて、視覚障害者も、パソコン作業や視覚障害者モニター³など、得意なこと、できることをしながら一緒に活動する。“一緒に美味しいものをつくって味わおう”という感じ」

視覚障害者も映画を楽しめる環境にするためには、たとえば洋画なら、字幕を音声化したり、音声ガイドを付けたりすることが必要となります。シティ・ライツには、それを実現するサポートメンバーが500人以上、登録しています（実働メンバーは約100人）。学生や社会人、声優、ナレーターを目指す人やすでにプロとして活動している人、深くかかわる人からフワッとかわる人まで、立場も熱量も様々。「親の介護が終わったから」と、しばらくぶりに顔を出す人もいて、それぞれが自分のペースで参加しているそうです。

代表の平塚さんはこの団体の在り方



◀シティ・ライツ代表の平塚千穂子さん（左）と、副代表の美月めぐみさん（右）。シティ・ライツを運営母体とするユニバーサルシアター、「シネマ・チュブキ・タバタ」にて



バリアフリー映画鑑賞イベント「シティ・ライツ映画祭」の様子。①第3回開催の、山田洋次監督のトークショーの場面（会場 江戸東京博物館大ホール）。②音声ガイドを聴いてもらうために用意されたラジオ。①②提供：シティ・ライツ

※シティ・ライツでは2008～2014年まで年1回（全7回）、「シティ・ライツ映画祭」を開催。この経験から、「イベントではなく、日常のなかにバリアフリー映画館が必要」だと痛感した平塚さんは、2016年に「シネマ・チュブキ・タバタ」を設立

について、こう語ります。

「たとえば声優を目指しているけど全然芽が出ないっていう人でも、活躍できる環境があれば、夢を実現できるかもしれない。だから、やりたいことができない人たちに、『ここで試してみたいよ』と言える場所にしたい。ほかでダメだと言われたことも、生き生きとやれる。『この土でなら、芽を出してみたいよ』みたいなの」

視覚障害者と晴眼者が“持ちつ持たれつ”の関係にあること、金銭的対価に代えられない体験ができることが、このボランティア団体が20年間、途切れずに存続してきた大きな理由なのかもしれません。

弟と同じタイミングで 笑ってみたいと思った

ところで、シティ・ライツはどんなきっかけで立ち上がり、平塚さんと美月さんはどこで出会ったのか。

遡ること21年前。映画に人生を救われた経験をきっかけに、映画の世界にはまり込んだ平塚さんは、映画好きが集まる異業種交流会に参加するようになります。そこで、手話の勉強をしていた仲間が、「聴覚障害者と一緒に観る、バリアフリー上映会をしよう」と提案。候補に挙がった上映作品は、チャールズ・チャップリンの『街の灯（City Lights）』。盲目の貧しい花売り娘と、金持ちの紳士と偽りながら彼女を支えるホームレスとの愛を描いた、サイレント映画です。

「チャップリンが、“言語の壁を越えて、世界中の人にわかる映画を”と、あえてサイレントで撮った作品を、目の見ええない人たちは観ることができないなんて」と、寂しい気持ちになり、「ラストシーンの感動を、視覚に障害のある人にも届けたい」と熱望した平塚さん。その一方で、「そもそも目が見えない人は、映画を観たいと思っているのか？」という疑問も。

そこで平塚さんは、実際に視覚障害者に話を聞いてみよう、視覚障害者と晴眼者が一緒に活動するトークパフォーマンスグループ「こうばこの会」を訪ねました。このとき、美月さんに出会います。

「映画はとっても観たいけど、音だけ聴いていても、わからないところがいっぱい出てきて迷子になってしまう。ましてや、それが洋画だったら、字幕を読めないから本当にお手上げなんだよ、と話しました。劇場で映画を観ることができたら、どんなにいいだろうって」

と語る美月さんは、こんなことを感じていたそうです。

「小学生の頃、ザ・ドリフターズの番組『8時だよ！全員集合』が好きだったんです。弟が大笑いしてびよんびよん飛び跳ねているのを捕まえて、『今、どうなってるの？』って聞いていました（笑）。会話や音でも面白さは伝わってきたけど、動きがわからないので。

未就学の弟が、少ないボキャブラリーで必死に説明してくれて、私と楽しさを分かち合おうとしてくれるんだけど、私がウケている頃には、弟は次の場面に

夢中になっていて。同じタイミングで笑うことは無理なんだな、とっていましたね」

結果的に『街の灯』の上映会は実現しなかったものの、「映画を楽しむことを諦めている視覚障害者がいる現状を、なんとかしなくては」と、切に感じた平塚さんは2001年、この映画の原題を冠した、バリアフリー映画鑑賞推進団体を設立するに至りました。

場面の中に入り込み 主人公の隣にいる感覚

シティ・ライツ設立後に平塚さんと美月さんらがすぐに始めたのは、音声ガイドの研究です。当時、日本では音声ガイドについてほとんど知られておらず、未開拓の分野でした。

音声ガイド制作は、視覚障害者が聴くだけでイメージできる言葉や表現を探究する作業。チーム（4～5人）を組み、一人あたり20～30分の場面を担当します。それぞれが考えたガイドをメンバーで検討し、違和感がある言葉や表現を指摘し合い、修正を重ねていきます。そして重要なのは、視覚障害者モニターの存在。実際に音声ガイドを聴いてもらい、その意見を反映するのです。

目を閉じて過ごしてみると、聴覚の情報だけではイメージできないことが山ほどあるのを実感できます。「あちら」「こちら」や「これ」「それ」と言われても、どの方向を指しているのか、何を指しているのかわからない。「帽子」と言われても、それは「キャップ」なのか「山高



▲音声ガイド制作に取り組む岡田裕克さん(左)と八木田幸恵(右)さん。「趣味を楽しむことで、目が見えない方の役に立てるなら、それに越したことはない」と、映画好きの岡田さん。「物の名称を正確に言わなくてはいけないので、毎回、調べものの嵐ですね」と、プロのナレーターの八木田さん

帽」なのか……。

シティ・ライツの音声ガイド制作では、決められた尺の中に言葉を収める(セリフと被らないようにする)、指示語や方向、物の説明などに気を配る、表情を説明するときは主観を入れず、見えていることを客観的に表現する(「悲しそう」ではなく「目を潤ませる」といったように)などの、ポイントや鉄則があります。

ここに挙げたものはほんの一部。目指すのは、「視覚障害者に心地よく映画を鑑賞してもらえるガイド」。

こうして積み上げてきた技術は、2016年、シティ・ライツを運営母体として平塚さんが設立した、日本初のユニバーサルシアター、シネマ・チュプキ・タバタ^{*4}(本誌2020年10月号で紹介)の上映作品で実用化されています。

では、音声ガイド制作の難しさや面白さは、どんなところにあるのか。自己研鑽の一環でこの活動に参加しているプロのナレーター、八木田幸恵(やぎた・ゆきえ)さんと、年間100本も映画を観るほどの映画通、岡田裕克(おかだ・ひろかつ)さんの、二人の音声ガイド制作者に聞いてみたところ、こんな答えが。

「視覚障害者の方はみなさん、『映画の中に入って観ている』と言いますね。主人公になったり、友人の役だったり、そばで見守っていたりすると。だから、そこから出さないでほしいと。広い

映画の世界を生きているのに、言葉によってそれを小さくしないでほしいと。たとえば、急に『カメラがその上から……』と、テクニカルな説明をされると、現実に戻されてしまうとか。ですから、映画の世界に最後まで浸ってもらえるようなガイドにすることを、肝に命じています」(八木田さん)

「雰囲気から感じ取りたいので多くの説明はいらないと言う方もいるし、見えているものを全部、説明してほしいと言う方もいます。視覚障害と一口に言っても、生まれつき見えない、中途失明、視野が狭いだけで部分的には見えるなど、症状はいろいろ。どんなふう想像力を育んできたかも、人それぞれ。その落とし所を探すのは難しいですが、そこに面白さも感じています」(岡田さん)

均一じゃなくいい その人らしいガイドを

「シティ・ライツの活動を始めて、音声ガイド付きの『男はつらいよ』を観て、初めてまわりにいる人と一緒に笑えたとき、『私、みんなと一緒にこのタイミングで笑ってる!』と思った瞬間に、うれしくて涙が出てきて。笑いながら泣いてしまいました」

と、美月さんは振り返ります。

今日では、スマートフォンのアプリ^{*5}を使うことで、音声ガイド対応になる作品も上映される時代になりました。そんななかでシティ・ライツは、どんなことを大切にしているのか。“シティ・ライツ流”の音声ガイド制作とは。

「一口に音声ガイドと言っても、様々なタイプのものがあります。制作する団体や組織では、それぞれ、何かしらの指針をもって取り組んでいると思います。『音声ガイドの存在を感じさせないくら

いに、消える解説がいい』とか。でも、何がよくて何が悪いという決まりはないと思うんです。私は、制作者の視点や感じたことが反映されているほうが良いと考えています」(平塚さん)

「映画の字幕翻訳では、翻訳家によって“らしさ”みたいなものがあるって、映画好きの間では好み分かれますよね。音声ガイドも、それと同じだと思います。制作者のフィルターがかかるのは自然なこと。その人のもつ知識や経験、バックグラウンドによって、考えることや出てくる言葉が変わってきますから。それを、晴眼者と視覚障害者とで出し合って、自分一人の視点からでは気づかなかった部分を感じ取っていくのが、音声ガイド制作の醍醐味だと思っています」(美月さん)

※次号『『シティ・ライツ』が耕してきたバリアフリー映画鑑賞という文化②～シアター同行鑑賞会編～』に続く。

*1 様々なアクセス/バリアを抱えた人たちと一緒に楽しめる映画。最も映画鑑賞が困難とされる視覚障害者も、セリフの合間に場面の視覚情報を補う音声ガイドを付けることで、バリアフリー化を実現。

*2 視力や視野に障害のない人。

*3 音声ガイドのクオリティを高めるために、出来上がった音声ガイドをチェックする視覚障害者。

*4 シティ・ライツを運営母体とする映画館。目や耳が不自由な人、車いすユーザーなど、様々な理由で映画館に行くのをためらっている人も、安心して楽しんでほしいという想いから誕生。音声ガイドや字幕付き上映を常時おこなう。

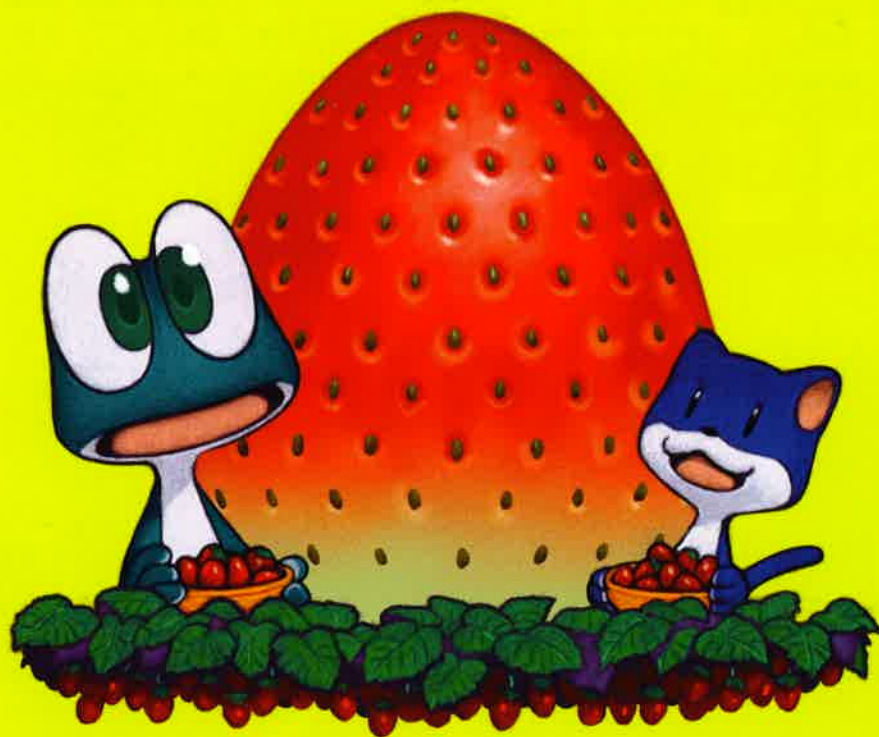
*5 HELLO! MOVIE(ハロームービー)やUDCast(ユーディーキャスト)。スマートフォンやメガネ型端末(スマートグラス)を使い、聴覚障害者は字幕で、視覚障害者は音声ガイドで映画を楽しむことができる。

《バリアフリー映画鑑賞推進団体
シティ・ライツ》
<http://www.citylights01.org/>

月刊 ケアマネジメント

3月号

特集



好評連載

長尾和宏の在宅介護を快適にする極意
『介護訴訟の現状と対策』

海外の福祉レポート

カナダで活躍する
日本人介護士インタビュー

特別企画

災害時、ケアマネは何ができるか

訪問介護の底力！ヘルパーの価値を見つめます
応援してまいります！

ヘルパーさん